

# 世界の犀

高島 春雄

## Rhinos of the World

by Haruo Takashima

### サイの種類

世界のサイとカんでも実は現世産は4属5種しかいないのです。奇蹄目サイ科 Rhinocerotidae に属し近縁のものにバク科があります。サイ科で化石のものは約30属あるとのこと。私は以前は、現世産は1属きりで上記4属は亜属として認める意見でしたが、大勢はもうそれでは通用しないので4属に分ける説に従います。4属5種は現在の定説でもうこの数字に変更を加えることはないでしょう。次の種名一覧中、英名は主なもの挙げるにとどめます。

*Rhinoceros* Linnaeus (1758) インドサイ属

*R. unicornis* Linnaeus, 1758 インドサイ Great One-horned Rhinoceros; Great Indian R.; Indian R.

*R. sondaicus* Desmarest, 1822 ジャワサイ Lesser One-horned R.; Javan R. 種名は“スンダの”意

*Didermoceros* Brookes (1828) スマトラサイ属 *Dicerorhinus* というのは異名です。

*D. sumatrensis* Fischer, 1814 スマトラサイ Asiatic Two-horned R.; Sumatran R. 2亜種に分ける説、3亜種に分ける説があります。

*Diceros* Gray (1821) クロサイ属

*D. bicornis* (Linnaeus, 1758) クロサイ African

Black R.; Black R. 4亜種に分けられます。

*Ceratotherium* Gray (1867) シロサイ属

*C. simum* (Burchell, 1817) シロサイ White R.;

Square-mouthed R.; White Rhinaster 2亜種に分けられます。種名は“扁鼻の”の意。

和名は今までにいろいろ出ましたが私は今では上記のような簡単な方がいいと思っています。しかしこれらが最良の標準和名とは決して考えません。シロサイ、クロサイはアカウミガメ、アオウミガメと同じ例で存外紛らわしい体色です。ジャワサイやスマトラサイにしたところでそれぞれの島の特産種ではありません。不幸にしてジャワサイは現在はジャワ島にしか残っておりませんが。まあどれも英名から由来しているのだから深くは咎めないことにしましょう。

### サイの渡来

例により日本への渡来をふり返ってみるとジャワサイとシロサイは日本に舶来したことなく剥製や骨格標本もありません。インドサイは6歳の雄が昭和33年11月多摩動物公園にはいて私共を驚かせました。多摩王という名を与えられ今も健在です。これとつがいになる雌が

インドのネール首相の厚配で今年8月16日到着したのはいよいよ驚きでしたが推定年齢30歳、向うでの呼名は女王という意味のラニでした。ラニ歓迎のためのサイ特集号が企画され、お蔭で私も世界のサイについて一筆せねばならなくなったのです。スマトラサイは1頭が大正10年6月大阪市立動物園に入り5年目の大正14年2月に病死しました。もう1頭はいるはずだったのが惜しくも輸送の船中で斃れました。大阪動物園のは死後剥製となり今も園内の標本室に陳列されていますが、終戦後間もなく盗賊侵入して角の部分



突進して来るクロサイ 立派な前角、或る外国映画より  
Rushing Black Rhinoceros.

を切り落して逃げ、また体に大きなひびがはいっているのは残念なことです。日本にただ1体で重ねて補充の機会もないこの貴重品を、修復し永く大切に保存して下さるよう大阪動物園長にお願い致します。予算がなければスポンサーを見つけるなり、動物園ファンに呼びかけて募金するなりしてぜひ復元して頂きたいものです。スマトラサイは現世サイ類中の最小者ながら、やはり堂々たる巨軀の持主であることがこの標本からも判ります。船中で死んだ分は骨骼標本に組み立てられ東北大学理学部にあります。また東京の尼ヶ崎製作所には同じ個体の頭部だけを剥製にしたものと他の部分の毛皮を鞣したのが秘蔵されています。

クロサイは昭和8年の春ハーゲンベックサーカスが日本に来た時1頭を連れて来ました。芸当はしません。このサイは日本に残留せずサーカスと共に引揚げました。昭和27年7月林寿郎氏がクロサイの雄を1頭連れて来られ、上野動物園にはいって日本の動物園に飼われる最初のサイになったわけです。これを先陣にクロサイは続々と舶来することになり巡回動物園やサーカスまでが連れ歩く時期もありました。熱海市の蜂須賀邸にはかつて故蜂須賀正氏氏がアフリカで猟獲したクロサイの頭部の剥製（角は模型）が残っています。それから国立科学博物館には剥製1体、骨骼1体が加わりました。剥製代もこういう大物になると15万円もしたそうです。神戸の動物園にいるクロサイのつがいは仲

がいいので将来の繁殖が期待されています。

### サイの種類識別

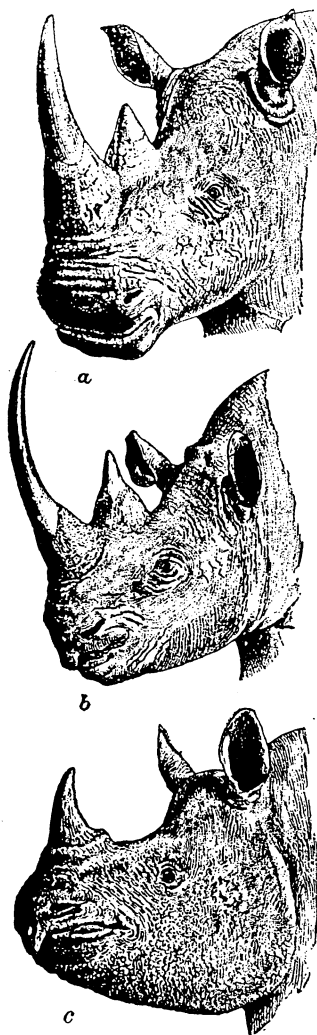
亜種の識別となると日本のように比較すべき標本の少ない国では不可能に近いですが、種類は少ないし識別は容易です。頭上に1角がある

か2角があるかに注意しましょう。1角だけで門歯がよく発達している、それに皮膚が厚くて深い皺（積）をなし、そういうひび割れで皮面がいくつかに分割された感じなのがインドサイとジャワサイです。これらは攻撃の時、角よりも下顎の鋭い門歯で食いつくほうが強力なのです。かつてアッサムの東、シンフォ地方で見つかったインドサイには2本角のがあったそうです。肩高は1.5~1.8mです。ジャワサイはインドサイに比べれば小さく肩高1.5mくらい、肩の前方のひび割れは中絶せず背上で両側のが繋がっています

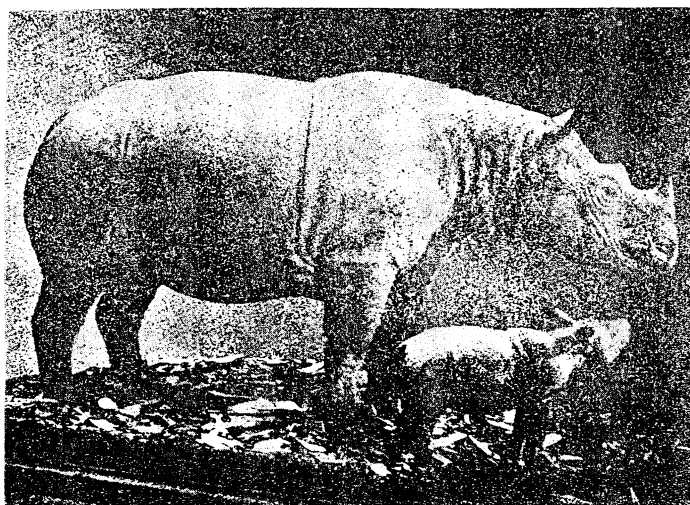
（インドサイでは中絶している）。鎧兜で身を固めた様子もインドサイ程物々しくなく、鋤打ちがないのです。角は貧弱で雄でもやっと25cmを越すくらいで、雌にいたってはごく短い全く生じないのもあるのです。角が二次性徴になるのは面白いことです。

スマトラサイも門歯はよく発達しており皮面に深い皺があります。しかし前2種程著しくはありません。だからゴツゴツした感じは

少ないのです。皮面に長くはないが比較的多くの毛を生じ、仔獣では特にはっきり見えます。



サイ3種の頭部比較図 a 鼻口のシロサイ b おちよぽ口のクロサイ c 単角のインドサイ  
Heads of three species of Rhinocerotidae  
a White Rhinoceros b Black R. c Indian R.



スマトラサイ ニューヨークのアメリカ自然博物館に展示される  
スマトラサイ親子の剥製標本、ビルマ南部で獲られたもの  
Mounted specimen of Sumatran Rhinoceros with its young.

前後に並ぶ2角があるのはなんといっても特徴ですが、後方の角は短くて5~10cmくらいで雌では発育が悪く遠くからでは1本角に見えることもあります。そのため1角のサイと見誤られることがよくあったそうです。前方の角は普通30cmですが世界の博物館に保存されるのに48cm、81cmなどという立派なものもありました。毛の色、生え方の粗密などは地方によって異なりインドネシア産は一般に灰色がかり毛も少ないとのこと。肩高1.2~1.35m 頭胴長2.4~2.7m でサイ類中最小とされています。大きさでの序列はシロサイ、インドサイ、クロサイ、ジャワサイ、スマトラサイとなります。

皮膚は深い皺を成さず、頭上に前後に並ぶ明瞭な2角があり、門歯はあっても痕跡的、攻撃には角を用いるのがクロサイとシロサイです。クロサイといっても黒くなく濃灰色あるいは濃褐色で森林生活を営み主に木の葉をむしって食べるから吻端は多少尖っています。角は後方が常に短い時によると逆に後方が長いのが見つかるそうです。シロサイよりも小さく肩高1.72m 頭胴長約3m 尾長0.7m、前方の角の長さは普通は50cmくらいですがかつてその彎曲に沿って測って1.34m というのがありました。猛獣映画に現れるのはほとんど総べてクロサイです。シロサイはサイ中最も大きく現世第2の

巨大な陸棲動物といわれています。肩高1.98m、淡灰色で平原に住み草を主食とするので口は四角で墓口状です。耳殻の端と尾にある剛毛を除いてはまず無毛です。耳はクロサイよりも長いそうです。後方の角は短くまっすぐで円錐状、0.45m になったのがあり前方のは長くてスラリとしておりかつて1.58m になりました。まるで大刀を頭上に頂いているようなものです。しかし動物園で鉄柵の構いの中で飼育すると“角磨き”をやってわれとわが身をすり減らし短く醜い恰好の角になるのが常です。

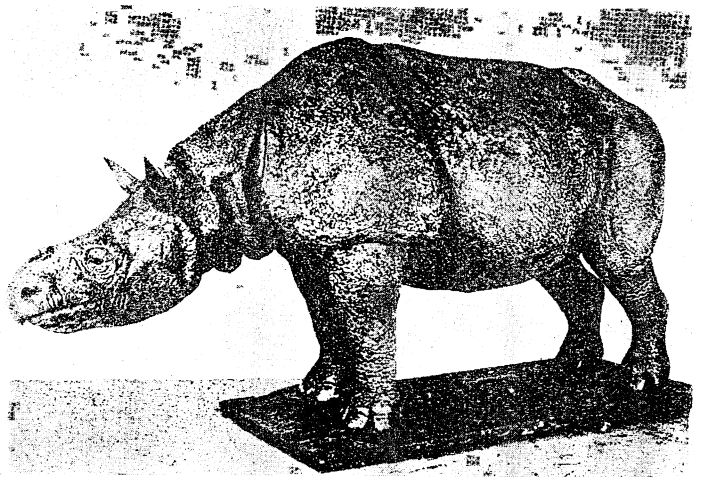
### サイの分布と現状

この項を書くのに諸書を参照しましたが、中でも Lee Herriam Talbot が“Oryx”という雑誌の第5巻第4/5号(1960)に載せている報告は大いに参考になりました。この号を見せて下さった今泉吉典氏に感謝致します。どのサイも例外なく著しく減って来ました。角を始めとしてサイには利用の途が多いので昔からさかんに狙われました。現在最多のクロサイでもアフリカ全体で10000以下になったようで、ジャワサイは24頭から45頭の間で危険に瀕しています。保護策も真剣に講ぜられ、文明国の動物園で近年繁殖に成功するようになったのは福音で、クロサイとインドサイがそれぞれ出産して話題になりました。ご承知のようにサイは南アジアとアフリカに別々の種類が見られるのです。インドサイはネパールからビハル・ベンガル・アッサムなどインドとパキスタンの北東部に分布しました。フランクフルト動物園のチメク氏 B. Grzimek が1958年にドイツの哺乳動物学雑誌に挙げている数字を今泉氏が紹介なさったことがあります。それによると現在はネパールに48頭、ベンガルに43頭、アッサムに350頭、合わせて約440頭残存するのみとのことです。タルボット氏は確実にいるのはネパール中央部に2カ所、アッサムに8カ所くらいと

しています。日本でのつがい繁殖に成功すればそれがネール首相に酬いる道になりましょう。ジャワサイはビルマ、タイ、交趾支那マラヤからスマトラ、ジャワに分布しました。もともとボルネオにはいませんでした。現在はマラヤとジャワだけでチメク氏によるとジャワに 10 頭以上住んでいるらしく、スマトラでは 1934 年以来滅亡、マラヤでは一時滅亡を伝えられたが少数残存、合わせて約 20 頭とあります。タルボット氏は近年いるらしいという情報はマラヤ中央部、タイ南西部、インドシナ

東南部から得られているが、確実なのはジャワの西端部 Udjung Kulon でここには Game Reserve (野獣保護区) があり保護状況は良好で 24~45 頭の残党がいる——と述べています。スマトラサイはパキスタン、アッサムからビルマ、インド支那、タイ、マラヤからスマトラとボルネオに分布しました。ジャワにはいませんでした。チメク氏は今は英領ボルネオのサラワクに 1~2 頭、インドネシア領に数頭、合わせて約 10 頭いるとしました。もしこの通りとすれば日本のトキやコウノトリにも比すべき極めて危険な状態といわねばなりません。しかしタルボット氏は今確実にいるのはビルマ北部、ビルマ西部、マラヤ中央部、スマトラ南部のそれぞれ小地域でビルマ方面には合わせて 35~46 頭棲息する、そのほかインド支那とボルネオにもいるらしいという情報があるそうです。序に記しますがトキは今年は佐渡に 5 羽、能登に 5 羽合わせて 10 羽ですし、コウノトリは兵庫県下に 11 羽、福井県下に 6 羽、合わせて 17 羽になります。

一方アフリカではクロサイはかつてはサハラ以南の全アフリカに弘布しました。今は南部ではほとんど滅亡、南東部でも大いに減りました。チメク氏は旧ベルギー領コンゴでもほとんど滅亡したようで西アフリカ全体で推定 500~1000 頭。多いのはタンガニイカとケニアくら



ジャワサイ ロンドンの大英博物館に在る雌成獣の剥製標本  
Mounted specimen of a female Javan Rhinoceros.

い、いくらでもいるように一般に想像されているよりは遙かに少なく総数は 1 万頭以下とのことです。シロサイは近年滅亡に瀕したと伝えられますが、それでもチメク氏によれば約 2000 頭残っています。その内訳は南アフリカのウムフォロジ保護区に 600 頭、ウガンダで 300 頭、ベルギー領コンゴのガラムバ国立公園に 600 頭、ウバンギの国立公園に 70~80 頭ということになるのです。保護区や国立公園では保護の実が挙がり次第に盛り返して来ているようです。同じチメク氏の書いたものには「十九世紀にはまだ南アフリカおよび中部アフリカの全域にわたり無数に棲息していた」とあります。

本誌第 11 巻第 3 号 (1959) に古賀園長の「インドサイについて」と題する記事があります。その一つ前の第 2 号の表紙は多摩のインドサイ雄のクロースアップであり、サイ関係の記事写真が多く載って第 1 サイ特集号の観があります。今回は第 2 サイ特集号です。(早稲田大学生物学教室)

### サイの繁殖賞はどこへ？

上野動物園では、かねてから、クロサイのおす・めすと一緒にしようと努力していますが成功していません (本誌 15 頁参照)。これにくらべ神戸王子動物園、福岡市立動物園では、それぞれクロサイをすでにおす・めす一緒に飼っておりまし、多摩動物公園でもインドサイのおす・めすがそろいました。日本でサイの最初の子は、どこの動物園でうまれるのでしょうか。(Pen)